OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治期の九谷焼図案における英国デザインの受容 ：松雲堂を事例として
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治期の九谷焼図案における英国デザインの受容
── 松雲堂を事例として

竹内　有子　京都先端科学大学

はじめに

明治初期以降，石川県の九谷焼製造においては，政府の殖産興業策に依って海外輸出を目的とした陶磁の近代化が行われた。その一つが 1887 年創設の金沢工業学校（1889 年に石川県工業学校，1901 年に石川県立工業学校と改称）による図案教育であり，西欧で製陶術を学んだ納富介次郎が初代校長を務めた。一方，製造現場でジャポニスムを背景に九谷焼の輸出に尽力したのが，松本佐平（1851–1918 年，号：左瓶）の松雲堂であった。

松雲堂に関する先行研究は少なく，その作風は狩野派等の花鳥画に代表される絵画風図案に彩色金襴出，古九谷風と様々に評されてきた。しかし，松雲堂が輸出陶磁に注力したことを鑑みれば，明治 10 年～30 年代にかけては西洋好みの図案が試行され，その図案に西洋のデザインの影響と変容が見られたはずである。特に，外国からの影響については未だ指摘がされていない。これを踏まえ，本発表では，松雲堂の図案における日英交流の様相及び影響関係を跡付けることを目的とする。

中央政府と石川県における殖産興業の交差

明治初期において，海外向け陶磁器の輸出を図った先駆は，九谷焼であった。その一契機は，1876 年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会にあった。勧業寮からは審査官として納富介次郎，事務官の塩田真を始め，お雇い外国人ゴットフリート・ワグネル，御用掛英国人フリッツ・クンリフ＝オーウェンら 90 名が渡米した。古代の土器から中世・江戸期に渡る茶陶を含む焼物，さらに磁器として有田焼や九谷焼を体系的に含む展示は，英国のサウス・ケンジントン博物館への納入が予定されたことによる。このように，明治初期における日本政府と英国の文化交流には，陶磁を巡って特筆すべきものがある。

一方，松本佐平は，同万国博覧会に「政府が交付する図案を基にして出品をし，多いに好評を得た」とされてきたが，『公式カタログ・日本出品目録』には佐平や松雲堂の名は記載されていない。但し，明治 10 年代の『温知図録原稿』陶磁器 14 部には，博物局製品画図掛から佐平に渡された皿用図案が見える。ここには，伝統的な花鳥画が見え，絵画的な図案が中央から供されていた。

明治 9 年，英国の産業デザイナー・クリストファー・ドレッサーは，フィラデルフィア万博への参加を経由し，サウス・ケンジントン博物館の代表として，日本へ寄贈する西欧の同時代の産業製品を携えて来日した。明治 10 年 1 月付内務省布達「英国美術社会長ドレツセル地方諸製造場遊歴ヲ許ス」によれば，ドレッサーは来日直後，石川県に来る予定が組まれていたが，実現しなかった。彼の帰国後，内務省博物館長・町田久成はドレッサー宛 1878 年 3 月 26 日付の書簡に「多様な英国製造業者から贈与された品物」について，「金沢・加賀の磁器製造業者からデザインと色彩の模範を作るために真似をしたいと依頼があった」と書いている。松本佐平が内務省博物館を訪れた証左は，管見の限りでは見つからないが，町田の手紙に見える「金沢・加賀の磁器製造業者」のなかに佐平が含まれた可能性は否定できない。ドレッ

サーが持参した陶磁器は 182 点，英国陶磁で最も多いのはロンドス商会の寄贈となるミントン社 51 点に続き，ドルトン社寄贈が 49 点に上る。彼が選定して持参した英国の陶磁は，同時代のデザイン教育を反映した装飾デザインと彩色であった。

松本佐平の渡航と万国博覧会への参加

松本佐平は，『定本九谷』によれば，明治 20 年頃より約 20 年に渡って横浜の直輸入商・綿野吉二より諸外国向け商品を，35–6 年頃には大阪の山中商会から英米向け商品を特約製造し，さらに明治 28–9 年に神戸で外国向けに売り込み・直輸出を行い，外人向け小売り店舗を設けた。まさにこの頃，佐平は西欧へ渡航し，現地の陶磁を観察する機会を得ている。彼は，1900 年パリ万博では石川県出品者総代，また 1901 年グラスゴー万博に日本工業館事務員として参加した。自らも西欧に駐在した長男・松本佐太郎は，この時佐平が「塩田真と図り日本工芸の販路拡張に努力した」と伝えている。1902 年に公刊した『仏英等諸国ニ於ケル実業視察報告書』において，佐平は西欧産業の視察と日本品の現状分析について記した。彼は，パリ万博に出品された日本陶磁の観察を踏まえ，九谷焼の形状と装飾デザインに改良が必要であり，実用のみならず日用品としての考慮が欠けていると省察している。

明治期における松雲堂の図案

1893 年，佐平が始めた「織物・染物・草模様等を取り入れた」新しいデザインは，「松雲堂風」と呼ばれたという。それまでの古い器や伝統的な画様を復興した模作とは異なる，新しい感覚のものであったとされる。これを例証する写真が『陶工松雲堂左瓶』に掲載されている。一つが，明治 35 年作の松雲堂風花瓶であり，朝顔がモチーフとなっている。朝顔の描写は写実的というよりも簡素化され，花瓶の形状と模様と余白の関係が相互関連しているように見える。もう一つは，大正 4 年の花瓶で，先に触れた輸出品に慣例化された花鳥がモチーフとなっているが，孔雀は正面から捉えられて小さく，牡丹の花弁と余白との関係を十分に練った配置となっている。尚，小松市立博物館が所蔵する図案（概算で約 3 千点）のなかでは，佐平の記名がある香炉の孔雀のデザインが類似を見せる。これらの例から察するに，「松雲堂風」とは，伝統的な画題を用いるとしても，明治初期に為された金襴出の彩色陶磁器・細密に基体全面に施された絵画的表現から離れ，全体と部分のバランス関係を検討してデザイン化したものと捉えうる。こうした新たな感覚は，西洋で製造されたジャポニスム，あるいはアール・ヌーヴォーの陶磁器に相通じ，佐平はライバルともなる仏英の製品を熱心に研究したのではなかろうか。

事実，松雲堂史料の図案には，活動初期には見られなかったような西洋の装飾模様を取り入れたものがある。例えば，幾何学的な模様と様式化された植物文様は，特にヴィクトリア時代英国の官立デザイン学校系の装飾の用い方と類似している。

おわりに

松雲堂史料の明治期の図案の中には，これまで指摘されてきた伝統的な画風・花鳥画や唐様の枠内に収まらない，同時代の西洋陶磁に特徴的な装飾表現の採用や西洋の文様の影響が見られる。そうした装飾文様の中には，英国のサウス・ケンジントン博物館・官立デザイン学校の教えに由来，乃至それらを参照したと思われるものがある。

同時代に，佐太郎の「高尚な意匠の紋章・図案画」という言説を以て「松雲堂風」と呼ばれてきた様式がいかなるものか，未だ定義付けられていない。さすれば従来の先行研究のように，日本の画様と着画技法だけの検討ではなく，西洋陶磁・文様との比較によって，それが明らかになる余地があろう。今後，松雲堂史料・図案及び作品の全体像を整理・把握するなかで，英国のデザインとの関係性をより具体化することを課題としたい。